

第10回大会のテーマ

『教育とセクシュアリティ：そこから見た日英の教育の現在』

テーマの趣旨

提案者：広瀬裕子

教育とセクシュアリティをテーマにする場合には、大きくいて二つの方向がある。ひとつはフェミニズムという領域で積み重ねられ議論されてきたジェンダー視点の限界を意識し、それがともすると差別平等論に矮小化していることに対する批判意識からその突破口としてセクシュアリティ概念を導入するものであり、もうひとつは従来欠落されていた異性愛性交型でないセクシュアリティを生きる人々を、性的マイノリティと捕らえて、その人々に対する正当な評価「権利」を主張することを主要に視点とするものである。

本大会では、後者すなわちマイノリティの視点を十分考慮しながらも、前者すなわちセクシュアリティ概念を導入した教育制度分析を目指す方向で日英の教育の現状を浮き彫りにすることを目的とする。

セクシュアリティは、人々の価値観や喜怒哀楽の中心的部分、あるいは広く定義すれば価値観や喜怒哀楽そのものでもあり、人々の具体的行動を左右するものである。従ってその制御は人々を「統治」する時の不可欠なファクターであると同時に、その充足は社会の安定化のための不可欠なファクターでもある。教育が人材育成、人づくりの中に必ずこの価値観に関わる部分を置いてきているのはそのためである。

性行動のケア、サポート、あるいは性教育として想定されるのものもその「統御」の一形態である。また、家族が個々人と社会をセクシュアリティで媒介する制度であるという視点もここで忘れるわけにはいかない。その統御の具体的形態及びその形成過程にまつわる攻防の論理を論議検討の対象とすることによって、より明確になる教育制度や社会の特徴がある。その分析を有効にするには、セクシュアリティの諸現象、諸相を把握することが不可欠であることもいうまでもない。